宇田川さんの 貝古記憶録

－不定期連載－

江の島仲見世通りの入り口、青銅の鳥居の目の前でお土産物屋「寶月（ほうげつ）」を営む宇田川英男さん。昭和元年生まれ、今年で99歳になるという、昭和の初めからの江の島をよく知る、いわば生き字引のような存在です。

今回は、8月の終戦記念日に想起して、ご自身の戦争体験や、江の島のお土産・貝細工についてなど、昔懐かしい記憶を辿り語っていただきました。

【語り手】宇田川英男さん
（「寶月」代表取締役）
※お話の雰囲気をそのまま伝えるため、話し言葉で掲載しています。

江の島の入口にある土産物屋「寶月」

「寶月」ができたのは昭和3年頃。この辺は埋め立て地で、昔は店の前まで波が来ていたんだよ。それで青銅の鳥居のところから陸になってた。実はうちは、初めは土産物屋じゃなくってまんじゅう屋さんだったんだ。でも日本が戦争で負けて、砂糖も粉も配給になっちゃって。だからもうやっててもしょうがないってなったんだろうね。「寶月」というのは、もともとそのお菓子屋の名前だったんです。せっかく親父がつけたんだからって、今でもそのまま使ってます。

店の前にある江島神社の青銅の鳥居には、実は細かく字が書いてあるんだよ。観察している人は少ないと思うんだけど、吉原の遊郭の店の旦那の名前も書いてあったりするみたい。その時代の人たちが寄進したってことなのかな。お店でもお土産としてよく売れるこの浮世絵の絵葉書（右下）、後ろに小さく見えているものは江の島土産なんだとか。これが江戸時代の江の島土産だったんだろうね。

江の島土産といえば貝細工

貝細工にも色々な種類があります。例えば青貝でできた細工とか、すり貝の細工っていうのも。あとはボタン細工、玉細工、貝のかたちを利用した花・鳥・人形などのセット物、帆船なども人気でしたね。

親父が真珠貝の彫刻をやっていて、それは貝細工の中では高級の部といわれます。ブローチ・ペンダントなどの花鳥柄や鯛・鯉・動物の置物などが主でしたね。でもね、昔からの江の島土産としては、ラッパとかコマだとかおはじきだとか、ラフカディオ・ハーンさんも書かれていたような子ども向けの貝細工が多かったみたい。

貝細工にも厳しい作業があります。例えば、青貝細工の材料は「あわび」なんだけど、あわびの殻を後ろから前から削っていって、セロハンぐらい薄くする作業が必要なんだよね。薄くなったあわびの殻を漆の上に乗せると青く光るんだよ。紫に光るやつ、ピンクに光るやつ、緑色に光るやつもあったりする。青貝細工の貝って綺麗だけど染めてないの。しっかり貝自身の色なんだよね。その薄くなった貝を使う工芸品には、若狭塗もあるし、輪島塗もある。そういうところにも出荷されてたんだよ。

貝細工で重要なのは貝の殻。身の需要はたくさんあるんだけど、実は殻を集めるのも大事な仕事なんですよ。だけど、殻ってそんなにたくさんあるもんじゃない。でも東京には築地があったから、そこに行けば殻もたくさんあった。だから貝細工を作れたんだね。材料が枯渇すると作業ができなくなっちゃうし、ここは東京に近いからできていたと思うんだけど、貝がないような地域ではあんまりできなかったって聞いたよ。そういえば、関東から北の方では、貝細工の製造っていうものはあんまりなかったですね。反対に、関西では貝細工が盛り上がっていて、それは伊勢があったせいでしょうね。伊勢と、和歌山県の串本で貝がいっぱい獲れるんだよ。紀伊半島の先端ですね。

江の島には元々貝を専門にしている店が多かった。だから貝に絡んだものが全国から集まってきていたわけです。それで「江の島貝細工」はずっと生きてたんだよね。江の島で作っていたから長続きした部分はあるけど、でもそれだけじゃなくて他所からも売り込みがあって色々入ってきて、賑やかでバラエティーに富んだものが江の島にいっぱい集まったんだろうね。

うちの親父がやってた彫刻の貝細工っていうのは、ちょっとグレードが高くてね…。貝細工ってあくまでお土産ですからね。あんまり高いものは売れないんだよね。ただ、当時神奈川県商工会かなんかがプロの彫刻師を派遣したりと、神奈川県が貝細工を奨励してたんですよ。親父も若い頃、そういう学校に通って技術を習得して、自分で工具持ってやってました。親父の作品はもうほとんどないけど、少しは店にあるかな。

私も、親父の隣で見ようと見まねで少しだけ貝細工をやってたよ。でも、貝の彫刻をやってても……、芸術ではないからね。良いものを作ってもお土産でしかないっていうのが、それで見切りをつけちゃった。それからは素人でもできる貝細工をやりだしたんだ。輸出もやったし、工場も持った。だけど昭和40年代の後半頃、それまで1ドル360円だったのが、280円になっちゃって、やればやるほど損しちゃうようになった。輸出に力を入れすぎちゃってたので影響が大きかったですね。それで残念だけどやめちゃいました。同業者も片瀬に4、5軒あったんですけど、気が付いたらみんなやめてましたね。

今残ってる貝細工は海外製が多いかな。フィリピンやインドネシアから貿易商さんが仕入れてきて売ってるって感じ。それが辛うじてあるけど、日本のはもう全然ないよ。子供の細工みたいな「これも貝細工か？」っていうような簡単なものは作れても、やっぱりそれは工芸品とまではいかないね。「また日本の貝細工を復興させたい、やりたい」って人が出てきても、江の島には貝細工を作る人がいなくなっちゃったし、教えてくれる方もいないよね。世の中広いから何とも言えませんけど。そういえば、貝ボタンなんかも随分なくなっちゃいましたよね。全部プラスチックのボタンになっちゃったから。

江の島青銅の鳥居左にある「寶月」

宇田川さんの戦争体験

私は18歳で入隊して、特攻隊に呼ばれていった。編成もされたけど、とうとう現場は行かないで終わった。戦争があと一ヶ月延びていたら死んでただろうね。

訓練も大変と言えば大変だったけど若かったし、食うもの食わしてもらってたからやれたね。「死ぬかも」というのは、そこ行かなきゃ気が付かないんだよね。そこっていうのは、あの帰らない飛行機に乗ったり、2人乗りの潜水艦で向こうの船にぶつかって爆破しちゃうようなやつ。それに乗ればもう完全に死ぬと決まってるんだけど、それに行かなきゃ死ぬって実感はなかったな。

私が行ったのは、滋賀県の琵琶湖の大津の隊。東京オリンピックの時に、近江マラソンってやってたでしょ。あのコースは私たちが作ったコース。兵隊の時に道を作って、私たちもそこで練習してたんだよ。それで、大津の仲間うちで、横須賀で編成があるとか、広島で編成があるとかって話が出るわけ。そこに行けば完全に死ぬわけだから、みんなしょぼっとしちゃうけど、そこ行くまではね、若かったからね。お国のためっていう教育というか、洗脳というか、されちゃってるから何でも名誉だとか言っちゃってさ。高揚感はあったけど、悲壮感はなかったね。ランニングハイとか言うけど、若者たちが毎日必死に訓練してたから、気持ち的には盛り上がってる感じだったかな。

いつも通り訓練をやってる時にね、あの天皇陸下の放送を聞いたんですよ。それで、玉音放送を聞き終わったら、班長が「うん。そういうわけだから」って、そう言うわけ。昨日までは脱走なんかしたら銃殺だったのにね。で、もう着の身着のままですぐその次の日に帰ってきた。

帰るために乗ったのは汽車の特別編成だったと思う。海兵隊を乗せて我々が乗っかって、それぞれの故郷に帰ったんだね。平塚あたりは燃えちゃって。地獄を見てきたみたいでした。爆弾の火事は簡単に消すことができないんだ。爆弾の火はぼうぼうじゃなくて、ちょろちょろちょろちょろと燃え続けてしまうから。そんなのを見てきたから、江の島の実家はどうなってるのかなって、怖くて想像もつかなかった。

朝4時頃、薄明かりの中帰ってきた。できたてで舗装されてない、砂利がゴロゴロの片瀬街道を荷物を担いで歩いた。木村ってやつと一緒に帰ってきたんだけど、出征する時に軍隊編成で別れ別れになっちゃって、そしたら彼も特攻隊編成になったんだよね。それがまた、会えたんだ。だからなんだかもう怖いものは何もなかったね。

ついに江の島に着いたらね、スーツの男とお嬢さんが新婚旅行に来ているのよ。もう違う世界に来たのかと思ったね。平塚の辺りは地獄だったのに、こうも違うんだと。この辺も結構やられてはいたけど、酷いところと比べるとあんまりにも無傷で驚いた。敗残兵みたいに呆然とただ帰ってきたわけだけど、江の島の平和な様子を見たらね、もう急に人間らしくなるというか、不思議と人間味が湧いてきたんだよね。それは忘れられないよね。ショックの強い体験でした。良いショックだから良いけどね。

でもまだ陸軍の兵隊が泥だらけになって作業はしてたんだ。だけどすぐそこに江の島の旅館があって、旅行に来てる人もいたわけだからね。なんだかすごいですよね。日本ってちっちゃいけど広いよなぁと思ったね。

江の島はどうして藤沢市になったのか

小学校入るときはこの辺は鎌倉郡川口村でね。4年生が終わる時に川口村が片瀬町になった。江の島が鎌倉市になるか藤沢市になるか決めたのは、住民投票だったんですよ。投票をやって、藤沢票の方が多かったんだね。大差だったか、僅差だったかは覚えてないけどね。龍口寺の下までは鎌倉市になったから、江の島も鎌倉になるかと思ったけど藤沢市に決まった。関心を持ってるような年齢じゃなかったけど、妙に覚えてますよ。当時の一大ニュースだったんだろうね。

喜多川歌麿の描いた大首絵。
荷物には紐でくくりつけられた
貝屏風や、干し雲丹といった
江の島の名物も描かれている。

「風流四季の遊　弥生の江之島詣」
（電子博物館みゆネットふじさわ提供）

強く記憶に残ってることと言えば、「雪ノ下の文士」と思しき方から届いた狂歌でのクレーム。江の島が藤沢になったことへの反対の気持ちが、匿名で狂歌で届いたんだって町議員の父に教えてもらったな。狂歌の出来が並じゃなくすごかったから記憶に残っているよ。

「弁天が　芋（遊行）の坊主と縁組めば　屁（江）の島臭しと　人は云うらん（遊覧）」

――雪の下山人

そういえば、最近江の島のトンボロがやけに話題になっているよね。昔は陸がつながった日にはそこが遊び場になってたよ。トンボロで一緒に野球をやってた中に、一人こいつは上手だなと思ったことあったけど、やっぱりそいつはプロになってたね（笑）。大沢啓二ってやつ。（※南海ホークスに入団し、現役引退後は日本ハムファイターズの監督に就任、「大沢親分」と呼ばれ親しまれた）

トンボロって名前を昔からよく使ってたっていうより、言われてみりゃ繋がる日もあったなっていうような感じで、今でもトンボロが起こると子どもの頃に陸続きになった場所で遊んだことが思い出されますわね。

（続く）